

## [調査研究]

## 東北大学における西洋古代史研究

— 附属図書館の有用性と研究の現在・過去・未来 —

遠藤 直子

## はじめに

2019 (平成 31) 年 4 月 1 日、筆者が一昨年度まで在籍していた東北大学大学院文学研究科・文学部 ヨーロッパ史研究室は、大学院改組にともない西洋史研究室に名称変更した<sup>1</sup>。西洋史専修とは、古代地中海世界から近現代のヨーロッパおよびアメリカ諸地域までを研究対象とするものであり、今日に至るまで1世紀近く、当研究室では古代史・中世史・近世史そして現代史が学ばれ、幾人もものすぐれた研究者を輩出してきた。しかしここ数年、古代史の分野が少しばかり危機的な状況を迎えているといわざるを得ない<sup>2</sup>。

本稿では、かつては学生で現在は図書館員である筆者が、利用者・職員という双方の視点から、西洋古代史の研究環境としての東北大学附属図書館を考察する。叶うことならばこの論考が、今後東北大学の西洋史研究室において古代史を研究テーマに選ぶとする人たちにとっての何らかのガイドになることを願うものである<sup>3</sup>。

## 1. 西洋史研究室

## 1.1. およそ 100 年の歴史

まず西洋史研究室が辿った経緯を、東北大学の歴史とともに概観してみよう。1907 (明治 40) 年 6 月 22 日、東北帝国大学は日本で 3 番目の帝国大学として創立した。1911 (明治 44) 年、澤柳政太郎が初代総長に就任、現在の 3 つの教育理念のうち「研究第一」「門戸開放」の 2 つが打ち出される<sup>4</sup>。附属図書館が設置されたのもこの年である<sup>5</sup>。1913 (大正 2) 年には理科大学で女子の入学が認められ、日本初の女性大学生が誕生した。

1922 (大正 11) 年 8 月に、法文学部が開設され、翌 1923 (大正 12) 年の 4 月 30 日に講義が開始する<sup>6</sup>。史学講座が開講したのもこの時であった。

「四月に講義が開始されたとは言え、教授の人選には非常な困難が伴った。学生数も僅か八十名に過ぎず、殆んどが専門学校出身の傍系学生で高等学校出身者は一割か二割くらいであつた。ただ女子学生の入学が認め

1 歴史科学専攻・ヨーロッパ史専攻分野から、広域文化学専攻・西洋文化学講座へ改称。東北大学文学研究科・文学部の研究室紹介ページ <https://www.sal.tohoku.ac.jp/research/specializations/lab/--id-18.html> : 西洋史研究室ホームページ <http://www2.sal.tohoku.ac.jp/europe/index.html> : 文学部概要 <https://www.sal.tohoku.ac.jp/ugrad/outline.html> : 文学研究科概要 <https://www.sal.tohoku.ac.jp/grad/outline.html> : Web アーカイブ <https://www2.sal.tohoku.ac.jp/history.html> .

2 2008 (平成 20) 年に松本宣郎教授が退職。2017 (平成 29) 年度末をもって、美学・西洋美術史研究室の芳賀京子教授の東京大学への転出により、東北大学における西洋古代関連の講座はほぼゼロとなってしまった。大学院文学研究科・文学部 総合人間学専攻 哲学倫理学講座の荻原 理准教授、大学院工学研究科・工学部 都市・建築学専攻 都市・建築計画学講座の飛ヶ谷潤一郎准教授の講座において、西洋古代が取り扱われることはあるが、西洋古代そのものを射程にしたものとは言い難い面がある。ギリシア語およびラテン語のクラスは、哲学、倫理学、思想史や医学、解剖学などの分野にも必要であることもあり継続している。2019 (平成 31 / 令和元) 年度は、ギリシア語をインド学仏教史が専門の尾園絢一・文学研究科専門研究員が、ラテン語を上述の荻原准教授と東方キリスト教神学が専門の宮崎正美・仙台白百合女子大学人間学部教授が担当。

3 以降、参考になるであろう資料を挙げていく。すべて東北大学附属図書館に所蔵があるもので、「[配架場所 // 請求記号 // 資料番号](#)」の順で記載する。所蔵件数・冊数等は、2020 (令和 2) 年 1 月現在のものである。

4 「実学尊重」の理念がいつ生まれたかは定かではないが、少なくともこれよりは後のことである。初山高仁、井原 聡「東北

大学の理念をめぐって——大学創設時の時代状況」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』6, 2011 年, 101 ~ 114 頁: 初山高仁「東北大学の歴史と『実学尊重』」『国際文化研究科論集』21, 2013 年, 50 ~ 51 頁。

5 東北大学附属図書館沿革 <http://www.library.tohoku.ac.jp/about/history.html> . 東北帝国大学附属図書館 編『[閲覧ノ栞](#)』東北帝国大学, 1937 年(本館書庫 BF1 旧事務 // UL511/054 // 00190119120) は、昭和 12 ~ 13 年次の附属図書館利用の手引きであり、当時の様子を知る貴重な史料となっている。コピーを重ねた複写のみ残り、長らく出どころが不明であった旧片平の詳細な分類表も巻末に付されている。『東北大学附属図書館白書』東北大学附属図書館, 1966 年(本館書庫 // UL274/086 // 00190118769) や『東北大学附属図書館要覧』東北大学附属図書館, 1967 年(本館書庫 // UL2/051 // 00190118777) は、現在の本館が設置される前の状況をリアルに伝えている。

6 法文学部設置の経緯は、東北大学百年史編集委員会『東北大学百年史 1 通史 1』東北大学研究教育振興財団, 2007 年(本館書庫 // FB22/0917 // 00070226475 ほか) 254 ~ 274 頁。創立委員であり初代法文学部長となった佐藤次郎教授(憲法学講座担任政治学講座兼任)は当時を述懐している。東北帝国大学庶務課 編『東北帝国大学ノ昔ト今——創立二十五周年記念——』(本館書庫 BF2 矢島文庫 // FD/38 // 01790042836 ほか) 66 ~ 69 頁: 『ものがたり東北大学の至宝』編集委員会 編『ものがたり東北大学の至宝』東北大学出版会, 2009 年(本館 2F 学関 // FD4/0356 // 00080212571; 本館書庫 // FD4/0356 // 00090344214 ほか)。東北大学ホームページ 沿革 <https://www.tohoku.ac.jp/japanese/profile/about/02/about0203/>: 歴史的背景 <https://www.tohoku.ac.jp/japanese/profile/about/02/about0202/> .

られていたことは注目に値する。附属図書館の書庫もこの年に落成する。階下六十六坪の事務室と、百四十坪の階上閲覧室を含む本館が生れたのは翌年のことである。ヴント文庫などの書物を収容出来たのは、当時のマルク、フランの下落もさることながら、一次大戦の現物賠償として得たといういきさつも見逃せない。法文のあゆみはその後順調な進展をみせ、昭和八・九年頃になると、教授陣、講座、学問的業績など幾多の面に於いて輝かしい時代を迎える。研究業績の場として、雑誌『文化』『法学』『経済学』が相ついで、百花りようらの様を呈するのである。十周年を記念して、また各自一篇の近業を持ち寄り、記念論文集を当時研究誌の出版を異例の処置で望んだ岩波から刊行する。九年三月から十年六月にわたつてのことであつた。昭和の年代に入ると留学中の教授が帰朝すると共に、各方面の大家を仙台に招き、講座も充実する。大正八年八月の八講座、八教授、五助教授の陣容は、昭和に入るこの頃には四十三講座、四十三教授、十七助教授と整つた。これら教授陣の筋金入りの浪人時代は、旧来のアカデミズムを突き破ろうとする研究の原動力となつていたので。このような背景から生まれた『文化』は、以後昭和十七年、復刊号が出るまでの間、法文学部の研究の歩みの重要な発表機関として学界に大きな位置を占めていた<sup>7</sup>。

美学講座の初代教授・阿部次郎は、法文学部の思い出を語る<sup>8</sup>。貴族院では法学士出身の役人は法律家ばかりで教養に乏しく、立派な役人を養成するためには法科関係の学問だけではなく文科系の講義もたくさんしこまねばならない。そのために東北に法文全体の学部が設置された。それまで日本にはない学部を設けるの

で、創立当時は「ひどく自由」で、「とに角始めは法・文の区別はなかつたのである」と。

1926 (大正 15) 年時点で、史学第一講座担任の中村善太郎教授、史学第二講座担任として大類 伸教授、美学講座担任の阿部次郎教授、西洋芸術史の兒島喜久雄助教授らの名が確認される<sup>9</sup>。

1947 (昭和 22) 年 10 月、東北帝国大学から東北大学に改称、1949 (昭和 24) 年には学制改革に伴い新制東北大学に改組、法文学部は解体され、文学部<sup>10</sup>・法学部・経済学部が設置された。

1953 (昭和 28) 年、東北大学大学院文学研究科 (新制大学院) が創設される<sup>11</sup>。

1964 (昭和 39) 年、史学講座 (第一・第二) は西洋史学講座 (第一・第二) に改称する。同年、川内に教養部と図書館の分館も設置された。

1973 (昭和 48) 年、文学部が片平より現在の川内キャンパスに移転、附属図書館本館も新築され、片平本館および教養部分館の資料はすべて統合された<sup>12</sup>。

1993 (平成 5) 年に教養部が廃止され、1997 (平成 9) 年には学部・大学院改組にともない 36 の小講座から 16 大講座へ移行、西洋史学講座からヨーロッパ史学講座への名称変更がなされた。

2000 (平成 12) 年、大学院重点化整備が完了、2004 (平成 16) 年には国立大学法人東北大学大学院文学研究科に移行した。この後、講座制は廃止されている。

## 1.2. 在籍した西洋古代史研究者

西洋史研究室には、古代ギリシア史が専門の原 隨園<sup>13</sup>が 1925 (大正 14) 年から 1930 (昭和 5) 年まで<sup>14</sup>、古代

7 『東北大学のあゆみ —— 開学五十周年記念 ——』東北大学新聞会、1957 年 (史料館 // 東北大 O/シ1), 21 頁。このくだりの記述だけでも、論文が 4~5 本書けるほどの示唆に富んでいる。現在の文学研究科の逐次刊行物に関しては <https://www.sal.tohoku.ac.jp/jp/research/pub/serials.html> : 東北大学学内刊行物目録 <http://www2.archives.tohoku.ac.jp/data/serial20110527.pdf>。

8 同上、58~59 頁。阿部次郎は 1921 (大正 10) 年春に東北大学へ招聘され、法文学部創立前に留学、1923 (大正 12) 年に法文学部創立より約半年遅れで着任、当初は東京から通い、翌年仙台に移住した。

9 『東北大学百年史 1 通史 1』266 頁。西洋文学第二講座担任として小宮豊隆教授の名もみられる。西洋史研究室に在籍した教員の氏名・在籍期間・専門などに関しては西洋史研究室の歴史のページにも記載されている。 <http://www2.sal.tohoku.ac.jp/europe/contents/history.html>。

10 史学講座 (第一・第二) が開講。

11 同時に教育・法・経済・理・工・農学研究科が設置された。

12 片平の旧本館は現在の史料館である。創設以来から 1972 (昭和 47) 年までに片平本館で受入れられた資料を旧片平 (東北大学独自の分類法 = 請求記号がローマ数字・カタカナ/アルファ

ベット・アラビア数字で構成される)、教養部分館が所蔵していた資料を旧教養 (日本十進分類法 = アラビア数字のみで構成される)、双方を合わせて旧分類と称する。地下書庫新分類、学問およびグローバル資料に用いられているのは国立国会図書館で使われている分類法 (アルファベットと数字で構成される)。現在、東北大学附属図書館の分類法はこれら 3 つに大別されるが、それ以外の分類法も多く混在している。

13 原 隨園『ギリシア史研究』1・2・3, 創元社, 1942~1944 年 (1 = 本館書庫旧片平 // IIIA5/ハ5 // 01600313242; 本館書庫旧教養 // 231/8 // 01810895231, 2 = 本館書庫旧片平 // IIIA5/ハ5 // 01600313 251; 本館書庫旧教養 // 231/8 // 01810895249, 3 = 農学分館共用書庫 (本館旧工専図書) // GG/051 // 01791409491): 同『新義西洋史』共立社書店, 1935 年 (本館書庫旧教養 // 208/8 // 01810745 146): 同『ギリシア史研究余滴』同朋舎, 1976 年 (本館書庫 // GA52/05 // 01840919811・01860438941; 本館書庫 BF2 学問本別置 // GA52/05 // 01850224141)。

14 わずか 5 年の在籍の後、京都大学に転出している。京都大学文書館・履歴検索システム <https://kensaku.kua1.archives.kyoto-u.ac.jp/rireki/?c=detail&id=000761>。

ローマ史専門の祇園寺信彦<sup>15</sup>が1950(昭和25)年から1975(昭和50)年まで、同じく古代ローマ史の松本宣郎<sup>16</sup>が1978(昭和53)年から2008(平成20)年までに在籍していた。原の転出から祇園寺の着任までは20年間のブランクがあったことになるが、西洋美術史の児島喜久雄<sup>17</sup>が1923(大正12)年から1937(昭和12)年に、古典学(西洋古代中世哲学史)・フランス文学担当で『プルターク英雄伝』の原典訳を行なった河野與一<sup>18</sup>が1927(昭和2)年から1950(昭和25)年まで在籍していたため、東北大学の学生が西洋古代を学ぶ機会が断たれてはいたわけではなかっただろう。

研究室にまつわる資料のうち戦前のものはほとんど焼失してしまっており<sup>19</sup>、現存する最古の時間割表は1959(昭和34)年度のもの[図2]である。

学生要覧<sup>20</sup>もまた、確認できたもとも古いものは1959(昭和34)年度のもの[図3]であった。

西洋史研究室出身の古代史研究者としては、平田隆一・東北学院大学名誉教授<sup>21</sup>、阪本浩・青山学院大学長<sup>22</sup>、新保良明・東京都市大学 共通教育部 人文・社会

科学系教授<sup>23</sup>、浦野聡・立教大学文学部 史学科世界史学専修教授<sup>24</sup>、清宮敏・教育学部 教育学科 中等教育専攻教授<sup>25</sup>、安井萌・岩手大学 教育学部 社会科教育准教授<sup>26</sup>といった名前が挙げられる。いずれも現在の西洋古代史学界の中心といえる研究者である<sup>27</sup>。

筆者が大学院博士前期(修士)課程に入学した2010(平成22)年時点では、筆者の他に6名の古代史専攻の院生が在籍しており、研究テーマに古代史を選ぶ学部生も何人もいた。院生と学部生とで古代史部会を構成し、月に1~2度の読書会や研究発表を行なっていたが、2011(平成23)年度末に前期・後期ともに大勢修了(学位取得)したのを境にして、院生の人数は減少の一途を辿る(これは西洋史研究室に限った話ではないが)。2012(平成24)年度に博士後期課程に進学した筆者ともう1名が、現時点では西洋古代史専修の最後の院生となってしまった。古代史部会は中世史部会と合同で活動することになったものの、現在自然消滅状態である。

15 祇園寺信彦『共和政期ローマの国家と社会』雄松堂出版、1999年(本館書庫 // GA54/039 // 00990140019・00990140027・00990209627)。史料館に人事記録が残る[図1]。名誉教授となった教員のみ、没後に記録が史料館に移管される仕組みとなっている。

16 松本宣郎 研究代表『ローマ帝国の支配下属州民の心性の研究』〈平成13年度~平成15年度(2001~3年度)科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書(課題番号13610440)〉2004年(農学分館共用書庫(本館科研費報告書) // KAKEN/2004/0488 // 00127018427) : 同『キリスト教徒が生きたローマ帝国』日本キリスト教団出版局、2006年(本館書庫 // HP61/021 // 00060082504 ; 本館書庫 BF2 宮田文庫 // GG/0380 // 00080339781)。

17 児島喜久雄『希臘の鉄』道統社、1942年(本館書庫 // K21/013 // 01840580024 ; 本館書庫旧片平 // VA1/コ4 // 01600481760) : 同『児島喜久雄画集』用美社、1987年(本館書庫 // KC229/041 // 00870126587・00880183120)。児島文庫 <http://www.library.tohoku.ac.jp/collection/collection/comentary.html#kojima>。

18 河野與一『現代佛蘭西哲學』岩波書店、1933年(本館書庫旧教養 // 108/6/4 // 01792624577) ほか著書・翻訳多数。河野文庫 <http://www.library.tohoku.ac.jp/collection/collection/comentary.html#kono>。新田義之『東北大学の学風を創った人々』東北大学出版会、2008年(本館2F学関 // FB22/0887 // 00080104992 ; 本館書庫 // FB22/0887 // 00090016682 ; 工学分館2F図書 // 377.28/73 // 03100010509 ; 医学分館共用書庫仮(図書) // FB22/16 // 01100009582) 178~243頁も参照。

19 1945(昭和20)年までの西洋古典学(西洋古代の歴史学のみならず、文学・哲学・美術史なども含まれる)の研究成果は、渡邊雅弘編『日本西洋古典学文献史——切支丹時代から昭和二十

年までの著作文献年表——』1・2・3、2001年(本館2F学関 // KE154/011 // 0130108710・00130108728・00130108736)に詳しい。

20 毎年発行されていたわけではなかったという。

21 平田隆一、松本宣郎 共編『支配における正義と不正——ギリシアとローマの場合』南窓社、1994年(本館書庫 // GA51/08 // 00970302431 ; 本館2F学関ゆかり // GA51/08 // 00100294142)。

22 2019(令和元)年12月16日付。阪本浩、鶴島博和、小野善彦 共編『ソシアビリテの歴史的諸相——古典古代と前近代ヨーロッパ』南窓社、2008年(本館2F学関 // GG71/082 // 00100189759)。

23 兼・同大学世田谷キャンパス図書館長。新保良明『古代ローマの帝国官僚と行政——小さな政府と都市』ミネルヴァ書房、2016年(本館2F学関 // GA54/0136 // 00180155599)。

24 浦野聡、深津行徳 編著『人文資料学の現在』1、春風社、2006年(本館書庫 // H11/028 // 00060151052) : 浦野聡 編『古代地中海の聖域と社会』勉誠出版、2017年(本館2F学関 // HK51/030 // 00170064328)。

25 清宮敏『殺人の穢れとボリス市民共同体』〈昭和63年度科学研究費補助金(奨励研究(A))による研究成果の印刷物送付書〉(農学分館共用書庫(本館科研費報告書) // KAKEN/1988/0175 // 00137018631)。

26 安井萌『共和政ローマの寡頭政治体制——ノビリタス支配の研究』ミネルヴァ書房、2005年(本館2F学関 // GA54/066 // 00090217695 ; 本館書庫 // GA54/066 // 00070135310 ; 文西洋史 // GA54/066 // 00080280337)。

27 ほか、今後の西洋古代史学界を牽引していくべき若手研究者として長谷川宜之、原賢治、大谷哲、小坂俊介らの名を挙げておく。いずれもが研究の傍ら講師として教育活動に従事している。

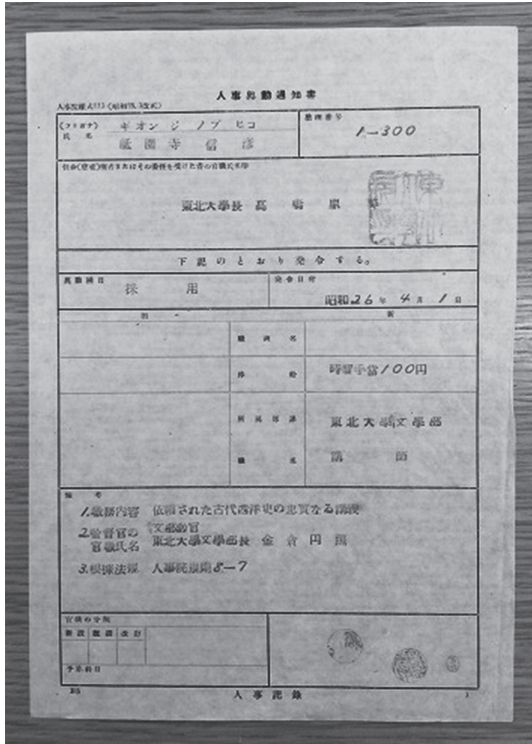


図1 1951(昭和26)年度の人事異動通知書(史料館蔵)。職務内容として「依頼された西洋古代史の忠実なる講義」と記されている。

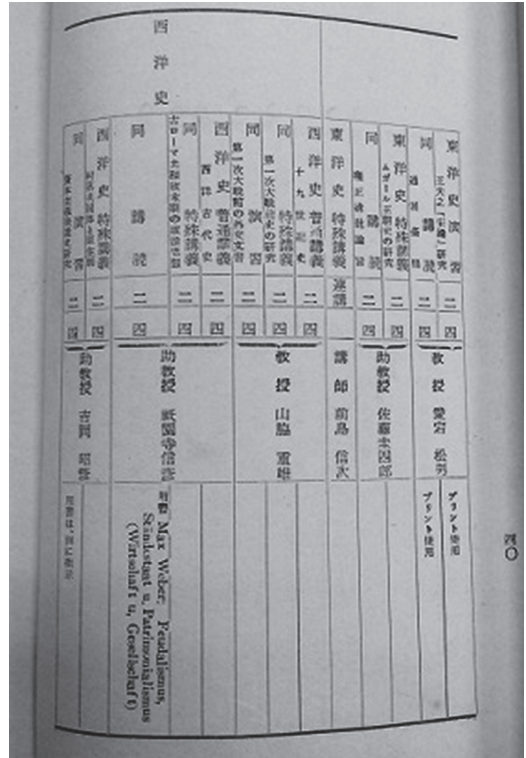


図3 1959(昭和34)年度の時間割表(史料館蔵)。祇園寺助教授の特殊講義で、Max Weber: Feudalismus, Ständestaat u. Patrimonialismus の講読と記されている。



図2 1959(昭和34)年度の時間割表(史料館蔵)。

### 1.3. 西洋史研究会

1932(昭和7)年、西洋史研究室に事務局を置く東北帝国大学西洋史研究会が発足する。1889(明治22)年の史学会創設の43年後であった。1955(昭和30)年、東北大学西洋史研究会に改称、1972(昭和47)年には西洋史研究会へと移行し<sup>28</sup>、現在に至る。年に1回大会が開催され、雑誌『西洋史研究』が発行されている<sup>29</sup>。大会の自由論題および共通論題、『西洋史研究』掲載論文には、松本現名誉教授の退職後も、偏ることなく古代史も採り上げられている。

28 西洋史研究会ホームページ <http://www2.sal.tohoku.ac.jp/europe/seiyoshi/index.htm> .

29 第1輯は1943(昭和18)年から、新輯第1輯は1972(昭和47)

年から発行されている。最新号は2019(令和元)年度の新輯第48輯。

## 2. 利用可能な資料およびサービス

### 2.1. 附属図書館

西洋古代史分野に関しての東北大学の強みは、今日の研究のメインストリームを基礎づけた研究の、いわば土台をなした史資料の豊富さといえるだろう。研究書に関していうなら、古い、現在の研究の基礎となったものが一通り揃っているといえよう。例を挙げるなら、モムゼンやギボンの研究成果である<sup>30</sup>。パウリ＝ヴィッソヴァの古典古代学大百科事典は全巻が揃っている<sup>31</sup>。

また、批判的校訂本の所蔵数が非常に多い。Bibliotheca Scriptorum Graecorum et Romanorum Teubneriana<sup>32</sup>, Scriptorum Classicorum Bibliotheca Oxoniensis<sup>33</sup>, Collection des universités de France<sup>34</sup>などが、かなり昔から受け入れられてきた<sup>35</sup>。そして The Loeb Classical Library<sup>36</sup>に至っては、地下書庫の新分類と旧分類(旧片平・旧教養ともに)、さらには整理待ち<sup>37</sup>のエリアにまで大量にひしめいているといった印象である。

使いたい時にいつでも使えるという意味では利点があるということなのだろうが、目下、特に新分類のロウブ版の配架が非常に乱雑な状態になっており(ラテン語のものとギリシア語のものがばらばらに混ざって、なおかつ無秩序に並んでいる)、目あてのものがあつたとしても見つけるのが困難なありさまとなっている。他の3シリーズも(おそらく受入時期や請求者、受入の目的が異なるためであろうが)、配架場所も請求記号もあちこちに分散した状態である。筆者も整理しなければと思いつつ、どういう順番で並べたらよいか思いあぐねてしまう(書誌情報に従うとしても、利用者目線ではわかりにくいものとなる)上に、明らかに使用頻度が低いことから、つい後回しになってしまっている。できることならばシリーズ配架が望ましいが、そのためには多大な労力と時間を要することだろう。この件に関しては、稿を改めて考察したい。

30 Theodor Mommsen, *Römische Geschichte*, Wien (本館書庫旧教養 // 232/10 // 01800041742; 本館書庫旧片平 // IIIA8-3/M3 // 01602117619・01602117627・01602117635 ※ 初版は1854年)。テオドール・モムゼンは1902年のノーベル文学賞受賞者である。同書には英訳・邦訳もある。Theodor Mommsen, translated by W. P. Dickson, *The History of Rome*, 1・2・3・4, New York, 1911 (本館書庫BF2 粟野文庫 // 232/1/1・2・3・4 // 01793137065・01793137073・01793137081・1793137090): テオドール・モムゼン 著, 杉山吉朗 訳『ローマ史』上・下, 文芸社, 2012年(本館2F学閥 // GA54/099 // 00130107513・00130107521): テオドール・モムゼン 著, 長谷川博隆 訳『ローマの歴史』1・2・3・4, 名古屋大学出版会, 2005～2007年(本館書庫 // GA54/060 // 00130218401・00130218396・00130218388・00130218370; 工建空間文化史 // 232/1/1 (・2・3・4) // 03070029253・03070029261・03070029270・03070029288 ※ 1・2・4巻は本館2F学閥に, 3・4は文西洋史にも所蔵されている。請求記号は本館書庫のものと同じである): Edward Gibbon, *The History of the Decline and Fall of the Roman Empire*, vol. 1-8, London, 1825 (本館書庫旧教養 // 232/2/1 (・2・3・4・5・6・7・8) // 01800041496・01800041501・01800041510・01800041528・01800041536・01800041544・01800041552・01800041561)。ギボンの『ローマ帝国衰亡史』は原著の版違いや邦訳も多数所蔵されている。邦訳は中野好夫訳が有名(学閥および書庫所在のもの)の請求記号はGA54/03)。

31 Pauly-Wissowa, *Realencyclopädie der Classischen Altertumswissenschaft*, Stuttgart, 1958-1978 (古典古代学大百科事典)。1839年に August Pauly により刊行が始まった。第1シーズン49巻, 第2シーズン19巻, 補遺15巻, 索引1巻の計84巻からなる。

刊行が終了したのは1978年(本館書庫 // G2/9 // 資料番号は省略; 本館旧片平 // ID/P3 // 資料番号は省略; Sonderabdruck (抜刷)が本館2号館準貴室チャーテルマン文庫 // ID/1 // 0179202812; 本館旧片平 // IVA3-5/K4 // 01602420813)。

32 通称トイブナー版。目下最大の古典叢書で、改定を重ねたテキストの信頼性は高い。東北大学における所蔵総数842件(以下4つのシリーズに関して、業務用OPACと利用者向けOPACでは所蔵件数に差異が生じるものがあるが、ここでは業務用OPACでの表示件数を記載する)。

33 Oxford Classical Texts (OCT), 数はトイブナー版に劣るものが信頼性は高い。所蔵総数119件。

34 ビュデ版。仏対訳。後述のロウブ版にやや勝る。中には優れた注釈を備えたものもある。所蔵総数518件。

35 旧分類の方は、蔵書印によれば、受入時期には数十年の開きがあり、誰が発注・購入したのか定かではないものが多い。

36 ロウブ版。英対訳。総数572件。教育機関向けのデジタル版もある (<https://mirai.kinokuniya.co.jp//2017/11/2155/>)。

37 所在としては“梱包”や“レファレンス整理中(利用不可)”となる。哲学や倫理学の研究室から納庫されたものが多い。実際問題としてロウブ版は飽和状態であるため、不用物品(図書・製本雑誌)の無償譲渡という形で寄贈するという道もあるのではないだろうか。例えば2019(令和元)年10月12・13日の台風19号で浸水の被害を受けた東京都市大学世田谷キャンパス図書館ではロウブ版はすべて廃棄処分となったと、筆者は新保良明館長(先述のとおり西洋史研究室のOBである)から直接伺っている。このほか大量にある重複資料を、ただ眠らせておくのではなく有効に活用する方法を模索するべきと考えるものである。



図4 ロウブ版 (本館書庫・地下1階新分類)。



図5 本館書庫・地下1階旧分類のロウブ版が配架されている区画。手前が旧片平，奥が旧教養。



図6 “梱包”の区画。ここに収められたロウブ版は哲学や倫理学研究室から納庫されたもの。

日本語で読めるものでは、西洋古典叢書<sup>38</sup>がある。現時点で73件77冊所蔵しており、既刊がすべて揃っているわけではないが、リクエストすればすぐに購入される類の資料である。わかりやすさを重視し、ギリシア語とラテン語に分け、背表紙に記された著者名もしくは書名の五十音順で並べているが、たびたび配架が乱れているので、(主な配架場所が学閲で開架式なこともあるだろうが)手に取る利用者が少なくはないことが伺える。

地下書庫新分類の西洋古代史の区画に焦点を絞ると、1990年代後半から2000年代半ば(つまり松本現名誉教授の在任期間中)に受け入れられたものがもっとも充実しており<sup>39</sup>その頃からほとんど動いていないことが一目瞭然である<sup>40</sup>。今回改めてじっくりと書架を検分

38 京都大学出版社によるシリーズ。<https://www.kyoto-up.or.jp/series.php?id=103>。主に学閲2階(KE211/035 ※ KEは言語・文学一般に分類される)に配架されている(なぜかアンミアヌス・マルケリヌス『ユリアヌス登場』の1冊のみ請求記号GA54/0132。※ GAは歴史叙述一般)。

39 筆者もかつて愛読した資料群が並んでいる。中には塩野七生氏の著作(の一部も)もみられるが、氏の作品を研究上どう位置づけるべきかは、小田中直樹『歴史学ってなんだ?』PHP研究所、2004年(本館2F学閲//G12/0133//00040145159;文西洋史//G12/0133//00130201215)24~39頁を参照。

40 筆者は2018(平成30)年より、業務上書庫行きの新着本のほぼすべてに目を通してはいるが、まれに法学の分野(ローマ法)

の洋書が入るほかは、和書・洋書ともに古代ギリシア史・ローマ史の専門書はほとんど受け入れられていない。対して、西洋古代史だけではなく他分野のものも含まれる論文集などは比較的受け入れられる(配架場所は学閲)傾向があるようである。南川高志編『378年——失われた古代帝国の秩序』山川出版社、2018年[シリーズ“歴史の転換期”](本館2F学閲//GA32/0168//00180114436;東北ア研図書室//GA32/0168//00180148816);牛村圭編『文明と身体 Civilization and the Body』臨川書店、2018年(本館2F学閲//G11/071//00180182731);上智大学文学部史学科編『歴史家の調弦』上智大学出版、2019年(本館2F学閲//G12/0239//00190106466)。

し(というのも、目新しいものが入っていない<sup>41</sup>ことはわかりきっていたので)、東北大学に来た当初この書庫の様子に大きな感動を覚えたにも関わらず、その後の研究生活において、研究機関としての大学のこと、後に続く人たちのことをあまり考えてこなかった院生時代の自分の姿勢を今は後悔している。職員である今、自分にリクエストの権限がないことがまことに残念でならない<sup>42</sup>。

とはいえ、最新の研究に触れることはもちろん大事であるが、その土台となっている先行研究がいなくなるものであったのかを知ることは決して無駄ではない。すぐれた研究成果とは最前線のいいとこ取りではなく古きものに裏打ちされてなおかつ新しいものであるべきなのだ。

## 2.2. 研究室所在

“文ヨーロッパ史(文西洋史)”所在の登録件数は1741件(図書1558件、雑誌183件)である<sup>43</sup>。資料の出版年は2010年から2019年までの10年間のものが

717件とものとも多く<sup>44</sup>、西洋史研究室全体としてみれば、資料の数の面で現在かつてないほど充実した状態だということになる。

その意味において、古代史も決してないがしろにされているわけではないことがわかる。古代史の専任教員が不在であっても、現在在籍している教授陣は定期的に古代史の分野のもので有用な著書を発注している<sup>45</sup>、他大学の古代史研究者からの寄贈本もある。東北大学の古代史勢が栄えていた時代は学界においても未だ記憶に新しく、諸先達の業績の大きさも感じるものである。

他方、明らかに不足であると思う部分もある。筆者が、これは揃ってほしいと考えるのが、まず *Corpus Inscriptionum Latinarum* (*CIL*・ラテン碑文集)<sup>46</sup> である。ケルン大学でオープンアクセス化<sup>47</sup>されているが、あまり利用しやすいとはいえず、できれば書籍の形での所蔵を希望する<sup>48</sup>。*Inscriptiones Graecae* (*IG*・ギリシア碑文集)<sup>49</sup> に関しても然りである<sup>50</sup>。

41 2015年に筆者が要望して購入された書籍などがもっとも新しい部類に入るだろう。Fritz Graf, *Roman festivals in the Greek East: from the Early Empire to the Middle Byzantine Era*, Cambridge, 2015 (本館書庫 // GA54/710 // 00150253015)。いったん研究室に入った後1年ほどして納庫されたものだが、納庫後の貸出記録は2020年1月時点でゼロである。OBである西洋古代史研究者から、具体的な資料について所蔵を希望する声も聞いている。例えば、Blackwell CompanionやCambridge Companionシリーズの古代史関連 (<https://www.librarything.com/series/Blackwell+Companions+to+the+Ancient+World> : <https://www.cambridge.org/core/series/cambridge-companions-to-the-ancient-world/6DD2A5A03B17CF5D8ED48D98EA4097D8>) は揃っているに越したことはないであろう。またローマ皇帝の即位年や生涯に関する基礎的データ一覧を掲載した D. Kienast, W. Eck, M. Heil, (eds.), *Römische Kaisertabelle: Grundzüge einer römischen Kaiserchronologie* (6., vollst), Darmstadt, 2017も有用と思われる(ちなみに2020年1月現在、国内で同書の2017年版を所蔵している館はない)。

42 教員の場合は“購入図書選定”、学生なら“学生図書リクエスト”(いずれもMy Libraryの利用者サービス)から希望図書を申し込むことができる。

43 “研究室行き”段階のものはカウントしていない。ほか、“文松本宣郎”所在のもの15件16冊中15冊が不明不在の状態、“文小野善彦”所在が7件(図書4件、雑誌3件。雑誌はすべて単品)、“文有光秀行”所在が43件(図書42件43冊、雑誌1件)。近年では教員個人の名前ではなく、研究室名で所在変更する傾向にある。

44 その前の10年間(2000年から2009年)のものは405件である。なお、出版年代と購入年代は必ずしも一致するものではない。

45 例えば、ホルスト・ブランク著、戸叶勝也訳『ギリシア・ローマ時代の書物』(文西洋史 // UM11/0236 // 00130193357) : 桜井万里子、本村凌二著『ギリシアとローマ』中央公論社、1997年(文西洋史 // GA32/048 // 00140045896) : ピーター・サルウェイ著、南川高志監訳、鶴島博和日本語版監修『ローマ帝国時代のブリテン島』慶應義塾大学出版会、2011年(文西洋史 // GG221/038 // 00110348840) など。

46 1853年にベルリンのプロイセン・アカデミーから碑文収集プロジェクト実施の委託を受けたモムゼンにより設立。1863年に第1巻が刊行された。

47 <https://arachne.uni-koeln.de/drupal/?q=en/node/291> .

48 ペーパーレス化が進んでいるとはいえ、紙の書籍はなくならないだろうというのが大方の意見である。「書物という物体には、おそらく、人間の営みの中で一朝一夕には切り捨てられない深い身体性が備わっている」齋藤貴弘「西洋古代史研究における電子書籍利用——その現状・課題・展望」豊田浩志編『モノとヒトの新史料学——古代地中海世界と前近代メディア』勉誠出版、2016年(本館2F学関 // GA47/016 // 00160050494)、64~70頁。

49 1815年にベルリン・ブランデンブルク人文社会科学アカデミーのプロジェクトとして設立した。

50 19世紀、考古学と共に発展した碑文学は文献史学の限界を押し抜け、「科学としての歴史」を可能にした。*IG* や *CIL* などの網羅的編纂事業の成果を踏まえることなしには、誰も西洋古代史の信頼おける個別研究や説得力のある通史を書くことはできない。浦野聡「パピルス——アピオン家文書」浦野聡、深津行徳編著『人文資料学の現在』1、春風社、2006年、223~224頁(註24も参照)。

### 2.3. 定期購読雑誌

西洋史研究室が定期購読している学術雑誌は55誌 [図7]、和雑誌は、主だった歴史学関係のものはほぼ網羅されている<sup>51</sup>。洋雑誌も古代史にとって有用な、国内の大学でもめずらしいものが揃っており<sup>52</sup>、専用ウェブサイト<sup>53</sup>と併用することでよりいっそう研究の質を上げることが期待できる。

### 2.4. 未登録資料

研究室に寄贈されたものの中に、図書・雑誌ともに未登録のものが少なからずあり、『西洋史研究』も2004年発行のもの(新輯33号)までは製本されて2号館に所蔵されているが、それ以降のものは登録されることなしに研究室に配架されている状態である。つまり、それらの資料は記録上では所蔵なし(OPACには当然表示されない)ということなり<sup>54</sup>、こうした状況は、研究室側に特に方針があつてのことではないという。しかし研究室員なら研究室に行けば利用できるとはいえ、大学全体でものを考えるのならば、やはりきちんと登録をし、所在を明らかにしておくことを提案したい。

	タイトル	和洋区分	刊行頻度名称	年間冊数
1	American Journal of Philology	洋書	季刊(年4回刊)	1
2	Annale	洋書	季刊(年4回刊)	4
3	Archiv für Reformationsgeschichte	洋書	その他の刊行頻度	1
4	Archiv für Reformationsgeschichte	洋書	年刊	1
5	Archiv für Sozialgeschichte	洋書	年刊	1
6	Bibliography of British and Irish History	洋書	洋書	1
7	Bibliothèque de l'École des Chartes	洋書	年2回刊	2
8	Blätter für Deutsche Landesgeschichte	洋書	年刊	1
9	Camden. Fifth Series	洋書	洋書	2
10	Classical Philology	洋書	季刊(年4回刊)	4
11	Deutsches Archiv für Erforschung des Mittelalters	洋書	年2回刊	2
12	Early medieval Europe	洋書	年2回刊	4
13	Gnomon	洋書	隔月刊	8
14	Historia. Einzelschriften. Zeitschrift für alte Geschichte.	洋書	洋書	1
15	Historia. Zeitschrift für Alte Geschichte	洋書	季刊(年4回刊)	4
16	Historische Zeitschrift	洋書	隔月刊	6
17	Historische Zeitschrift	洋書	洋書	1
18	History. New series	洋書	季刊(年4回刊)	5
19	Jahrbücher für Geschichte Osteuropas. Neue Folge	洋書	季刊(年4回刊)	4
20	Journal of Early Christian Studies	洋書	季刊(年4回刊)	4
21	Journal of Late Antiquity	洋書	年2回刊	2
22	Klio	洋書	洋書	2
23	L'Année Philologique	洋書	洋書	1
24	Le Moyen âge. 5e série : Revue d'Histoire et de Philologie	洋書	季刊(年4回刊)	4
25	Mitteilungen des Instituts für Österreichische Geschichtsforschung	洋書	年2回刊	2
26	Revolutionary Russia	洋書	年2回刊	2
27	Revue historique	洋書	季刊(年4回刊)	4
28	Royal Historical Society Transactions. Sixth series	洋書	年刊	1
29	Russian History	洋書	その他の刊行頻度	4
30	Speculum : A Journal of Mediaeval Studies	洋書	季刊(年4回刊)	4
31	The American Historical Review	洋書	季刊(年4回刊)	5
32	The Classical Journal	洋書	季刊(年4回刊)	4
33	The Classical Quarterly. New series	洋書	年2回刊	2
34	The English Historical Review	洋書	季刊(年4回刊)	6
35	The Journal of American History	洋書	季刊(年4回刊)	4
36	The Journal of Ecclesiastical History	洋書	季刊(年4回刊)	4
37	The Journal of Hellenic Studies	洋書	年刊	1
38	The Journal of Imperial and Commonwealth History	洋書	季刊(年4回刊)	6
39	The Journal of Roman Studies	洋書	年刊	1
40	Traditio	洋書	年刊	1
41	Zeitschrift für Historische Forschung	洋書	季刊(年4回刊)	4
42	Zeitschrift für Historische Forschung	洋書	年刊	1
43	Вопросы истории	洋書	月刊	12
44	現代史研究	和書	年刊	1
45	史林	和書	隔月刊	6
46	史学雑誌	和書	月刊	12
47	思想	和書	月刊	12
48	社会経済史学	和書	季刊(年4回刊)	4
49	西洋古典学研究	和書	年刊	1
50	西洋史学	和書	年2回刊	2
51	西洋中世研究	和書	年刊	1
52	東欧史研究	和書	年刊	1
53	歴史と経済	和書	季刊(年4回刊)	4
54	歴史評論	和書	月刊	12
55	歴史学研究	和書	月刊	13

図7 西洋史研究室で定期購読している雑誌一覧

51 西洋史研究室に所在がないものでも、たいていのものは附属図書館2号館もしくは教育学部・経済学部・法学部および東北アジア研究センターの図書室で閲覧可能である。

52 ほかに、部分的に所蔵しているものや、購読終了してしまったものもある。例えば *Journal of Roman Archaeology* は松本現名誉教授の在任中は毎月受け入れられていたが現在は購読しておらず、目下国内で継続購読しているのは東海大学附属図書館1号館のみで、しかも最新号は(OPACに表示されるまで数ヶ月を要するとみられ、少なくとも学外者には)すぐには閲覧できない状態であるため、相互利用サービスでも対応できない場合がある。そうすると、入手するためには研究者個人のネットワークに頼ることになるが、学部生にとっては少々難易度の高い話となる。

53 Perseus Digital Library <http://www.perseus.tufts.edu/hopper/> (原典・英訳の検索) : The Latin Library <https://www.thelatinlibrary.com/> (古典ラテン文献の閲覧) : TOCS-IN <http://projects.chass.utoronto.ca/amphoras/tocs.html> (二次文献検索) : L'anne philologique <http://www.annee-philologique.com/aph/> (西洋古典学の文献検索サイト ※学内のみ) : Bryn Mawr Classical Review <http://bmcbr.brynmawr.edu/about.html> (BMCR : 書評) : Gnomon Online <http://www.gnomon.ku-eichstaett.de/Gnomon/en/Gnomon.html> (書評), 外国語文献・論文を読む前に、書評に目を通して、その資料にどんな内容が書かれ・どのような点で評価されているか・問題点があるかを把握しておけば、購読の効率が上がる。

54 図書館側から問い合わせがあつたとして、研究室外もしくは学外に貸出ができるか否かは資料による。



## 2.5. レファレンスサービス

そうした不足分を補うのが、レファレンスサービスである<sup>55</sup>。国内に所蔵があるものであれば、複写もしくは現物借用が謝絶されることは（よほどその資料が劣化している場合でもない限り<sup>56</sup>）まずないといっている。多くの私立大学の場合とは異なり、貸出元のポリシーが許せば、借用した資料を館外に持ち出せることが多いのも利点のひとつである。

レファレンス係<sup>57</sup>のスタッフの仕事は迅速かつこまやかで、筆者自身も、複写依頼を通すより先にオープンアクセス化されている論文を見つけてもらったことや、資料に関する疑問に納得のいく回答をもらった<sup>58</sup>経験は数知れない。

依頼してから資料が届くまでの時間は4～10開館日とされているが、だいたい3・4開館日で欲しい資料を手にするというのが筆者の実感である。ここ数年で、著作権法に基づいた決まりが厳格化されているというが、不便に感じたことはない。先述のCILやIGも、（専門家でなければ非常にわかりづらいことであろうのに）必要箇所のコピーをきちんと取り寄せてもらうことができた。受付館によっては、依頼した際の情報に不備があった場合などには即座に謝絶されることもあるというが、当館レファレンス係は、必ず確認の連絡をくれるのも行き届いたところといえよう。

## 3. おわりに：西洋古代史の火を消さないために

本学では、1年次に基幹科目・展開科目・共通科目からなる全学教育科目のほか、必修科目の「人文社会総論」、「英語原書講読入門」と選択科目の「人文社会序論」を履修、2年次から所属する専修（研究室）が決まり、

全学教育科目とともに文学部の基礎専門科目（概論・講読等）も履修することになり、3年次から本格的に研究室の構成員としての活動を始める、という流れになっている。

大学によっては入学時点ですでに専攻が決定している場合もあるが、東北大学の仕組み上、受験生の段階から専攻分野や希望の研究室（およびそこに所属している専任教員の専門）までをきちんと把握しているというケースは多いとはいえないだろう。

カウンターに入っていると、古代ギリシアやローマに興味を持っていると思いき学生がどうしても目についてしまう。彼ら彼女たちのプライバシーを侵害するつもりは毛頭ないが、どうか繋げてくれと念じずにはいられない。集中講義の講師陣<sup>59</sup>から、とてもよい学生たちだが古代史専攻者がいないのが残念であるといわれるたび、筆者はただただ頷くほかはない。

東北大学は、西洋古代史研究の研究環境としてどうか、と問われれば、筆者は迷わず「環境としては十分」と答えるだろう。少なくとも卒業論文なら質の高いものを書き上げられると断言できる。西洋史研究室の教授陣は視野が広くプロGRESSで、たとえ自身の専門とは異なることを学生が希望したとして、その希望をねじ曲げさせるようなことは決してない。また学生同士も横のみならず縦の繋がりも緊密で、卒論構想発表会などでは（人数が半減しているとはいえ）院生が学部生に、研究のプロセスをくり返しレクチャーすることだろう。

修士以上となるとどうか？ ある程度論文作成の手法を身に付け、学会に繋がりをつけておけば、東北大学所属ということはむしろ強みになるだろうが、こればかりはケースバイケースとしかいいようがない<sup>60</sup>。

55 利用案内 <http://www.library.tohoku.ac.jp/guide/guide.html> .

56 東北大学附属図書館から他大学へは、18世紀に出版されたかなり劣化した書籍であっても、現物の貸出を行なっている。

57 組織再編により2019（令和元）年7月1日から参考調査係と相互利用係が統合の上「レファレンス係」と改称、「学習支援係」が新設された。

58 以前、論文に引用するために取り寄せたローマ時代の神殿址に関する調査報告シリーズのナンバリングがおかしく、そのまま引用すると筆者自身の不手際と見なされかねなかったために、問い合わせた。当時の相互利用係スタッフは出版元のアーカイブや当該年次の目次をすべて確認し、申請時のナンバリングに不備があったと結論づけてくれた。

59 毎年1名ないし2名の研究者を他大学から招聘し西洋古代史に関する講義が行なわれる。

60 古代ローマ史研究者の本村凌二氏は、ローマ史担当教官不在時に東京大学大学院に進学したという。弓削 達『地中海世界——ギリシア・ローマの歴史』講談社、2020年（原本は『新書西洋史2地中海世界——ギリシアとローマ』講談社、1973年）、200頁（本館1F学関新書講談社学術//US1/0229/2597//00190116703）。大

学院進学を視野に入れた段階で打っておくべき手をいくつか挙げておく。なによりもまず、できるだけ早めに指導教官に相談することである。Researchmap（研究者のプロフィール管理サイト <https://research.map.jp/>）の存在を知っておくことも重要である。プロフィールを入力しつつ、修士課程進学後にどのように業績をあげていくべきかシミュレーションすることを推奨する。各種研究助成に関する情報収集も欠かせない。日本学術振興会特別研究員（通称・学振）に申請するならば、修士1年になった時点から準備を進めておくべきであろう。東北大学でも毎年年度末に学振申請のための説明会が開催されている（<http://www.bureau.tohoku.ac.jp/kenkyo/jsps/kenkyuin.html>）：[http://www.bureau.tohoku.ac.jp/kenkyo/jsps/kenkyuin\\_3.html](http://www.bureau.tohoku.ac.jp/kenkyo/jsps/kenkyuin_3.html)）。2019（平成31）年からは文系と理系を分けた説明会となり、2020（令和2）年1月時点では、かつてはなかった申請書類に関する資料も専用ページに掲載されている。古代史の会（東京大学文学部・大学院人文社会系研究科西洋史研究室員が幹事を務める。定期的な集会を開催するわけではないが、メールマガジンで学会・研究会・講演・ワークショップなどの情報が配信される）、古代史研究会（京都大学大学院文学研究科西洋史研究室内 <https://kodaishiken.client.jp/>）、古代世界研

筆者は研究室のOGとして、また図書館員として、図書館には頻りに足を運ぶべき、と主張したい<sup>61</sup>。書庫の中を、あの蔵書を、見たことがあるかないかというだけでも結果は違ってくるのだ。ここは、日本にいながらにして、本場の人たちに負けない研究ができる場所なのだ。

こういって、さらにこんな疑問や迷いをもつ人が現われるかもしれない。どうして日本で西洋古代史を勉強しなければならないのか？と。実際に筆者は、海外へ行った方がいいのか、行かなければだめか、という後輩の不安を耳にしたことがある<sup>62</sup>。それに対する答えもまた、図書館の中にある。筆者自身が遭遇した天の声のような一節を解題してみよう。

ギリシア・ローマ文化やキリスト教を文化の根底にもたない日本の研究者にとって、西洋古代史研究は古代そのものを理解するだけの作業ではなく、古代ギリシア・ローマを「古典古代」と呼び研究してきたヨーロッパ人の歴史とその性格を知ることができるものである。古代ギリシア史・ローマ史は今日のヨーロッパのどこか一国の歴史に還元されない普遍的な性格をもつゆえに、その研究は古代そのものの解明だけでなく、その研究

史を通じてヨーロッパ人の本質、いわゆるヨーロッパ・アイデンティティにも迫りうる学問なのである<sup>63</sup>。

西洋史学の基本は文献研究にある。日本は伝統的に西洋の知識を重視し、膨大な数の本や雑誌を購入し続けてきたため、現在の日本の大学図書館には、西洋史を本格的に学びたい大学生にとって十分な史資料が所蔵されているのである。とはいえ研究の深化に伴い、現地の資料の閲覧や研究者たちと切磋琢磨したいという欲求が生じたら留学をすればよい。要は学問的資質や成長に応じて場所を選ぶべきということである。また、西洋史学という学問は、日本にはあってもヨーロッパにはない(!)。例えば古代ローマ史はグローバルかつ普遍的に追求されるテーマで、その学問的中心は当然ヨーロッパの大学にあるだろうが、それを他者としての「西洋史」の中に位置づけて考えようとする問題の立て方は、きわめて日本的であり、しかも独創的であり得るのだ<sup>64</sup>。

研究手法や自らの立ち位置に迷った時に、きっと助けしてくれる、それが本であり史資料であり図書館なのである<sup>65</sup>。

研究会(事務局は首都大学東京 人文社会学部 人文学科 歴史学・考古学教室 高橋亮介研究室内 <http://www.comp.tmu.ac.jp/kodaisekai/index.html>)へ会員登録しておけば、有用な情報を見逃す心配はほぼなく、また国内外での研究発表の機会も得られるため、積極的な参加が望ましい。

61 意外に知られていないらしい新着図書案内 (<https://opac.library.tohoku.ac.jp/opac/newbook/?lang=0&codeno=1>) や キャンパス間搬送サービス (<http://www.library.tohoku.ac.jp/guide/delivery.html>) のことも併せて明記しておく。

62 ここ10年で学界の国際化は急速に進み、そのためのバックアップ活動も頻繁に行われるようになった。日本中世学会 (<http://www.medievalstudies.jp/>) の若手セミナーや、東京大学の附属研究所 CIRJE を活動拠点とした Historian's Workshop (2016年より西洋史のみならず日本における歴史学研究を世界に発信するために始動 <https://historiansworkshop.org>) が様々なワークショップを開催している。他大学の教員の授業を聴講するという手段もあるが、現在仙台市内で西洋古代史講座を開講している大学はほとんどない。ただ、国際化とともに研究界におけるデジタル化も進んでおり、筆者も東京会場で行われる読書会に何度かビデオ会議形式で出席している(環境によってはできない場合もあり、試験段階ではあるが)。学会、ひいては授業参加の形式も、多様化していく余地はあるものと考えられる。

63 服部良久, 南川高志, 山辺規子 編著『大学で学ぶ西洋史 古代//中世』ミネルヴァ書房, 2006年(本館2F学関//GG71/071//00060237316; 文西洋史//GG71/071//00160026397 ※OPACに表示されるタイトルが表紙に記載されているものと若干異なって見えることに注意が必要である), 10頁。

64 服部良久 他編『人文学への接近法——西洋史を学ぶ』京都大学学術出版会, 2010年(本館2F学関//GG36/08//00100144529), 63頁。

65 末尾にて、これから西洋(古代)史研究に取り組む学部生向けに、東北大学が所蔵する資料で有用なものほんの一部を紹介

介する(基本的に出版年順。現在修理中のためOPAC非表示になっているものは除外した)。

- ① 伊藤貞夫, 本村凌二 編『西洋古代史研究入門』東京大学出版会, 1997年(本館2F学関//GA51/07//00980041101; 本館書庫//GA51/07//00970028913・00970058573)。20年以上前に編集されたものだが、現在西洋古代史研究の大家となっている研究者陣が若手・中堅であった頃にまとめられた必携書である。細かい分野ごとに読むべき著作・論文を網羅している。
- ② 弓削達, 伊藤貞夫 編『ギリシアとローマ——古典古代の比較史的考察』河出書房新社, 1988年(本館2F学関//GA51/04//00880283691・00880365499; 本館書庫//GA51/04//00890320315)。前掲書の編者が多数、執筆陣に加わった、充実した内容の論文集。
- ③ 桜井万里子『古代ギリシア社会史研究——宗教・女性・他者』岩波書店, 1996年(本館書庫//GA52/043//00960071509)。
- ④ 島田誠『コロッセウムからよむローマ帝国』講談社, 1999年(本館2F学関//GA54/040//00990301761; 本館書庫//GA54/040//00990145218)。
- ⑤ 『西洋古典叢書がわかる』京都大学学術出版会, 1999年(本館2F学関//KE152/038//00090178946)。西洋古典の主要な系譜と、西洋古典叢書シリーズ(京都大学学術出版会)における刊行(予定)書目一覧を取録。筆者が東北大学で研究生活を始めた初年の2009年11月時点では東北大学附属図書館では所蔵しておらず相互利用で現物貸借しているが、その1ヶ月後に受け入れられている。なお、2017年に新しい版が出ているが、そちらは非売品である。
- ⑥ 周藤芳幸, 村田奈々子『ギリシアを知る事典』東京堂出版, 2000年(文西洋史//GG591/05//00130160058)。
- ⑦ 地中海文化を語る会 編『ギリシア世界からローマへ——転換の諸相』彩流社, 2001年(本館2F学関//GA51/015//00170058571)。
- ⑧ 桜井万里子 編『ギリシア史』山川出版社, 2005年(本館2F学関//GG591/08//00090202066; 文西洋史//GA32/053//

## 謝辞

このたびの調査に際し、東北大学附属図書館情報管理課雑誌情報係・浅野優子氏、東北大学大学院文学研究科・文学部 広域文化学専攻西洋史研究室助手・池野健氏、東北大学史料館准教授・加藤 諭先生、日本学術振興会特別研究員・小坂俊介氏、東北大学附属図書館情報サービス課レファレンス係・松田麻衣氏（以上、氏名の五十音順）には貴重な資料・情報を提供していただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

（えんどう なおこ，附属図書館情報サービス課）

- 
- 00100187 439)。
- ⑨ 中井義明 他著『教養のための西洋史入門』ミネルヴァ書房，2007年（本館2F学閲//GG71/073//00070219570；文西洋史//GG71/073//00170034869ほか）。
- ⑩ 本村凌二『地中海世界とローマ帝国』講談社，2017（初出は2007年（本館1F学閲新書講談社学術//US1/0229/2466//00170084691））。
- ⑪ 桜井万里子，本村凌二『集中講義！ギリシア・ローマ』筑摩書房，2017年（本館1F学閲新書ちくま新書//US1/0207/1295//00170124022）。
- ⑫ 井上浩一『私もできる西洋史研究：仮想大学に学ぶ』和泉書院，2012年（本館2F学閲//GG36/09//00120244855；文西洋史//GG36/09//00130292671）。「憶える歴史から考える歴史へ」に始まり，西洋史研究の基礎，実践，卒業論文作成までの4年間の課程を“バーチャルに”学べる1冊。
- ⑬ 大学の歴史教育を考える会編『わかる・身につく歴史学の学び方』大月書店，2016年（本館2F学閲//G21/031//00160193525）。高校の歴史から大学における歴史学に至るまでの学び方の要点を，具体例を挙げながら多角的に解説している。
- ⑭ 伊藤民雄『インターネットで文献探索』日本図書館協会，2019年（本館2F学閲新着図書//UL41/085//00190080065※新着図書は1ヶ月の展示ののち学閲へ所在変更予定）。現役の大学図書館職員による文献検索ガイド。西洋古代史に特化したものは紹介されていないが，目を通しておいて損はない手引書である。
- ⑮ 村上紀夫『歴史学で卒業論文を書くために』創元社，2019年（本館2F学閲新着図書//G21/033//00190092079）。著者は日本史専門であるが，歴史学の分野での論文作成に必要なことはすべて詰まったすぐれものである。冒頭の頁は読んだ全員が肯くことだろう。
- ⑯ リン・ハント著，長谷川貴彦 訳『なぜ歴史を学ぶのか』岩波書店，2019年（本館2F学閲//G12/0237//00190088483）。歴史学とは，現代の問題を見据え，よりよき未来を予測するためのものであることを，鋭い切り口で訴えかけている。